

[音 楽]

国際社会に生きる日本人としての音楽科教育

－「音楽」の認識を広げる年間指導計画のあり方－

廣川由紀子*

1 はじめに

文部科学省中央教育審議会では、2005年10月「新しい時代の義務教育を創造する」答申をまとめ、翌1月「教育改革のための重点行動計画」を発表した。「国際社会の中で活躍できる心豊かでたくましい人づくり」をめざし、4つの戦略をうちだした。戦略1「教育の目標を明確にして結果を検証し質を保証する」では、学習指導要領の見直しが行われている。その内容に「国際社会に生きる日本人としての自覚を育成。」がある。現行の学習指導要領も、「豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること」が4つの基本的な柱として編成されている。

このように、「国際社会に生きる日本人としての自覚を育成する」ことは、これまでもそしてこれからも、義務教育の中で大きな位置を占めてくる。それでは、そのための音楽科の役割とはどのようなものだろうか。それは、自国の音楽文化や他国の音楽文化をすべて「音楽」として認め合い尊重し合う感性を育み、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成することではないだろうか。現行の学習指導要領では、表現活動で、わらべうたや日本の民謡が取り上げられ、楽器の取り扱いについても「我が国や諸外国に伝わる様々な楽器」¹⁾が盛り込まれてきており、教科書教材でもそうした日本の音楽の楽曲を取り入れてくるようになった。しかし、まだ、これまで行ってきた西洋音楽の基礎基本を踏襲した中での「ちがう音楽、別な音楽」といった扱い方である。重嶋は「日本人の音楽観は、西洋音楽の音楽観になりきっているといっても過言ではなからう。それは、およそ一世紀に遡る西洋音楽の学校教育への導入による文化変容の実態として捉えることができる。その音楽科教育の歴史の中で、日本の伝統的な音楽の学習指導は、時代や社会の移り変わりによって、それぞれの意義付けがなされ、見え隠れしながら今日に至っている。しかし、現代に生きる子どもにとって音楽は、いわゆる西洋音楽の様式による音楽がすべてであり、日本の音楽は未知の異文化の音楽として受け止められるであろうことが推測される。」²⁾と述べている。また、現代日本社会において、子どもは就学する前にすでにマスメディアが配信するいわゆる流行の音楽にどっぷりと浸っている。テレビやCD、DVD(ビデオ)、ゲームなど、生活そのものが流行の音楽に囲まれているのである。

自国の伝統的な音楽や楽器が「未知の異文化の音楽」であり、マスメディアが配信する音楽に浸って生活している子どもたちにとって、義務教育9年間に於いてどのような音楽科教育が施されれば、先に述べたような国際社会に生きる日本人となることができるのだろうか。まず小学校では、音楽経験が乏しく偏っている子どもたちに、様々な音楽やその元となる「音」そのものをできるだけたくさん経験させ、「音楽」の概念を広げることが大切だと考える。教科書の音楽だけでなく、日本の音楽をはじめ、様々な音楽や音を「音素材」として捉え、紹介していく(経験させる)教育課程を構築することで、広く「音楽」として認識することができる「感性」を育んでいきたい。

2 研究の目的と方法

本研究では、これまで子どもたちが「音楽」として捉えてこなかった生活の中の身近な音や日本の音楽、日本の楽器、世界の音楽や世界の楽器を可能な限り取り入れた指導計画を作成し、その実践によって児童の「音楽」の概念を広げる。それにより、日本の音楽をはじめ、さまざまな音楽を広く「音楽」として認識することのできる「感性」を育てる。

* 妙高市立妙高高原南小学校

3 実践の構想と概要

(1) 第4学年の教科書教材とその指導計画の分析

実践の実際は、第4学年を取り上げて行う。本学年の使用教科書は「教育芸術社 小学生の音楽 4」である。一般的には、教科書の教材曲と題材をもとにした年間指導計画の作成資料をもとに、各校の特徴や地域の特性をふまえて指導計画を作成する。したがって、本教科書の教材と「年間指導計画作成資料 第4学年」について分析する。

第4学年の教科書は、34の教材曲（教材曲は複数曲の場合も含め）、巻頭の「学年の歌」を含め8つの題材で構成されている。そのうち、「きょう土の音楽、こきりこぶし」を「日本の音楽に親しもう」という題材で取り上げている。そのほかには、「さくらさくら（日本古謡）、まきばの朝（文部省唱歌）もみじ（文部省唱歌）」が「こころのうた」として取り上げられている。日本の音楽は、全体の中で2／34わずか5.8%にすぎない。「こころのうた」を含めても4／34で11パーセントである。題材の中での割合は、1／8で12.5パーセントである。これまでの教科書よりも増えているが、アジアの音楽やアフリカの音楽や音、楽器などは、取り上げていない。

1つの題材として、日本の音楽を取り上げることはこれまでも実践されているが、ここでは、もっと頻繁に日本の音や音楽、アジアや世界の楽器や音楽、音に触れることができるように指導計画を工夫した。日本音楽学習の提案としては、伊野が「教科書と一緒に進める日本音楽学習の年間計画」³⁾で小学校1，2年生の年間計画を具体的に提示している。伊野の案では、教科書の題材と活動を「日本」の視点から見直し、教材例や活動例を示している。教科書の題材を学習しながらも日本の音楽を学ぶことのできる優れた提案である。また、予想される展開の中では、教科書の計画と試案の計画をどのように取り上げていくかといった具体的な方法も提示されている。しかしながら、ここでは音楽を一つの音楽様式である「日本音楽」からの視点で学ぶのではなく、「音の素材」として指導計画に組み込むことを試みた。「音の素材」としては、日本だけでなく生活の中の音やアジアの楽器や音、現代音楽やジャズなど、様々なジャンルに渡り可能な限り経験させることを目的とする。つまり、いろいろな音楽や音の「紹介」をすることで、子どもたちが「聞いたことがある」「知っている」「この音は好きだ」などという、素朴な音楽の原点ともなる感覚を培っていきたい。このように、たびたび日本の音や楽器、世界の音や楽器、生活の中の音を耳にしたり、手にしたりすることにより、自然に東洋・西洋にかかわらずさまざまな音を「音」の素材の1つとして捉え、「音楽」の種類として違和感なく認識していくことができる。したがって、子どもが自分の好きな音を選んで学習する際は、音楽様式にかかわらず、いろいろな楽器や音のコラボレーションが行われてもよいのではないかと考える。

(2) 年間指導計画の試案 第4学年

上記のことをふまえ、これまでの年間指導計画を活用し、そこに新たな可能性として、どんな楽器や音、活動を組み込んでいくことができるかを考え、指導計画を作成した。（この中には、ヨーデルのように高学年の鑑賞教材で教科書教材として扱っている内容もあるが、繰り返して音楽に触れることが大切だと考え、取り入れている。）

「組み込む音、活動」…生活の音、日本の音や音楽、世界の音や音楽、楽器を学習やねらいに関連づけた内容

大きな学習の流れ	題材名	題材のねらい	組み込む音、活動	教材名
学年の歌		・年間を通して愛唱したり、歌う楽しさを味わったりするための歌唱教材。	教科書に載っている国の民族音楽を聴く。	子どもの世界
・音楽活動の楽しさを感じ取って、学習への意欲を高めるようにする。 ・日本の伝統音楽に親しんだりするようにする。	歌と楽器のひびきを合わせよう	・旋律の階名視唱や視奏に親しみ、声や音が重なり合う響きを感じ取って演奏することができるようにする。	・箏を用いて、「さくらさくら」を弾く。（篠笛） ・歌舞伎の擬音笛	さくらさくら いろんな木の実 歌のにじ とんぴ
	日本の音楽に親しもう	・旋律の特徴や響きの違いを感じ取りながら、日本の伝統音楽に親しむようにする。	・和太鼓で、リズムを真似る。 ・篠笛とこきりこを入れる。	花がさ音頭／神田ばやし こきりこぶし まきばの朝
・音の特徴や音色の違いを感じ取ったり、これを生かして表現	いろいろな音のちがいを感知取ろう	・音の特徴や音色の違いを感じ取って、想像豊かに聴いたり表現したりすることができるようにする。	・身近な楽器の中に、音の出るおもちゃ。手拍子、ポディーパーカッション、生活音なども	音集め 音のカーニバル とんぴ／ガボット／ クラリネットボルカ

したりする力を育てるようになる。		・イメージに合った音を探して、表現の仕方を工夫することができるようにする。	入れる。 ・フルートと共に篠笛や龍笛、オーボエと共に筆簾といった、共通点のある楽器を取り入れる。	
・旋律の特徴や曲想を感じ取ったり、これを生かして表現したりする力を伸ばすようにする。	ふしのとくちょうを感じ取ろう	・旋律の特徴を感じ取って、想像豊かに表現したりすることができるようにする。 ・旋律の特徴を生かして、レガートやスタッカートなどの歌い方や楽器の演奏の仕方を工夫することができるようにする。	オーケストラの演奏と共に、雅楽の演奏や歌舞伎の下座音楽を取り入れる。	もみじ あいのあいさつ／ ピッチカートボルカ 陽気な船長 あたらしいえがお オーラリー
	曲の気分を感じ取ろう	・曲想を感じ取って、想像豊かに聴いたり表現したりすることができるようにする。 ・歌詞の表す様子を思い浮かべて、歌い方や楽器の演奏の仕方を工夫することができるようにする。	大太鼓で雪の降の様子を表現する。(歌舞伎の効果音の導入)	友だちシンドバッド つるぎのまい 冬の歌
・歌い方や楽器の演奏の仕方など、これまでの学習を生かして、友だちと一緒に表現する楽しさを味わうようにする。 ○歌い方は、音楽の種類によってちがうことが分かるようにする。	音をきき合って合わせよう	・声や音が重なり合う響きを感じ取って、聴いたり演奏したりすることができるようにする。 ・互いの声や音を聴きながら、拍の流れに乗って演奏の仕方を工夫することができるようにする。	グレンミラーのジャズバージョンの「茶色の小びん」を聴く。 その他のスウィングジャズを聴く。	パレードホッホー きゅう友 空に雲に おどろう楽しいポー レチケ 茶色の小びん
	生き生きと歌おう	・発声や呼吸の仕方に関心をもって歌い方を工夫したり、声をそろえて歌う喜びを味わったりすることができるようにする。	長唄、ブルガリアンボイス、ヨーデル、ホーメイなどを聴いていろいろな声の出し方に触れる。	歌よひびけ グッデーグッバイ
みんなで楽しく		・各校が実態に即して弾力的に扱うことのできる教材。		ゆりかごの歌 他

(3) 「第4学年 日本の音楽に親しもう」の実践

① 指導計画の概要

ア 題材を取り扱うときの工夫

ここでは、「きょう土の音楽をききましょう。」「日本のふしを歌いましょう。」の活動文のもと、「きょう土の音楽(花がさ音頭)(神田ばやし)」「こきりこぶし」を教材曲として取り上げる。教科書では「きょう土の音楽」は「花がさ音頭」と「神田ばやし」を中心に扱っているが、その地域に応じた教材選択が出来るようになっている。そこで、新潟県の誇る民謡「佐渡おけさ」をたっぷり聴かせ、実際に踊りを見たり、真似たりする活動を取り入れた。郷土芸能はいずれも子どもたちの日常生活の中で接するものとちがうが、我が国に伝統的に伝わる芸能として、特色や違いを感じさせて関心を高めたい。

「こきりこ」はとなりの富山県の民謡ということもあって、比較的馴染みやすい。教科書ではリコーダーを用いて伴奏を付け、身近な打楽器でリズム伴奏を工夫して加えるという活動の展開を示しているが、簡単にできる「手作りこきりこ(本物のこきりこは人数分ないので)」を用いて、「こきりこ」の打ち方を取り入れて歌と一緒に入れるようにした。「こきりこ」という曲であるからこそ、ぜひ、「こきりこ」を鳴らしながら歌わせたかった。また、合奏は5

人ずつの3グループで行い、A：リコーダーとピアノ伴奏、B：篠笛で伴奏なし、のどちらかを選択することとした。リコーダーピアノとのコラボレーションを行ってもよいし、民謡風に「こきりこ」と篠笛を選んでもよいということである。大切なことは、自分たちで好きな音を選んで演奏することである。打楽器は、小太鼓を響き線なしで用い、締太鼓の代わりとした。その他に、グループで工夫して他の打楽器を入れてもよいこととした。以上をまとめるとこの題材での教材の取り扱いについて工夫は以下になる。

- ・郷土の音楽を「花がさ音頭」「神田ばやし」に限らず、できるだけたくさん聴く。違いや、同じところを探す。
- ・新潟県の民謡「佐渡おけさ」たっぷり聴く。実際に踊りを見せてもらい、自分たちも見よう見まねで真似をしてみる。
- ・「こきりこぶし」では、「手作りこきりこ」を一人一組持ち、「こきりこ」の打ち方を覚えて取り入れる。
- ・民謡の「こきりこぶし」と教科書教材の「こきりこ」を聴き比べ、A：リコーダーでピアノ伴奏、B：篠笛で無伴奏のどちらかを選択する。
- ・打楽器伴奏の工夫は行わず、合奏に専念する。

イ 指導計画について

指導計画は、全8時間である。1次は「きょう土の音楽をききましょう。」2次は「日本のふしを歌いましょう。（こきりこぶし）」である。1次3時間、2次5時間の時間配当を行った。指導のおおよその計画は以下の通りである。（なお、ここでは、指導上の手だてと評価については割愛し学習活動のみを掲載した。）

時	教材曲	学 習 活 動
1 ・ 2 ・ 3	き よ う 土 の 音 楽	○各地の音楽を聴く。 ・それぞれの音楽を聴き比べることで、特徴の違いを感じ取る。 ○曲の構成を把握する。 ・聞こえてくる楽器の音色を見つれたり、演奏の仕方を真似したりして聴く。 ・お囃子の違いを聴いたり、雰囲気の違いを感じ取る。 ○新潟県の民謡「佐渡おけさ」を聴いて、歌ってみる。 ・実際の踊りを見て、踊り方を習い、見よう見まねで踊る。
4 ・ 5 ・ 6 ・ 7 ・ 8	こ き り こ ぶ し	○曲の感じをつかむ。 ・「こきりこぶし」の民謡と教科書の編曲のものを聴き比べ、特徴を見つける。 ・民謡の独特の歌いまわしや頭声的な発声ではない声の出し方に気づかせる。 ○旋律の特徴をつかみながら歌う。 ・旋律を歌詞で歌う。 ・歌詞の意味を理解する。 ・声の出し方を工夫する。頭声的な発声ではない声の出し方で歌う。 ○リコーダーパートをリコーダーと篠笛で吹く。 ・リコーダーパートをリコーダーで練習する。 ・リコーダーパートを篠笛で練習する。この際、篠笛の運指を覚える。 ○こきりこの打ち方を練習する。 ・こきりこを一人一組持って、歌に合わせて打つ練習をする。 ○打楽器のリズムを教科書の例に沿って練習する。 ・教科書のア、イ、ウのリズム伴奏の例に沿って、練習する。 ◎3つのグループで、「こきりこぶし」に挑戦する。 ・グループの演奏形態を相談して決める。 ・打楽器の選択や楽器の分担をして、練習する。 ◎発表する。

4 実践の実際

(1) 「こきりこぶし」の各グループの実践

指導計画の6時間目に、「こきりこぶし」のグループ練習に入った。3グループでそれぞれどの形態で演奏するか話し合った結果、なんと3グループともBパターン（篠笛で無伴奏）の方を選んだ。篠笛はなかなか満足に音を出す

ことができず、練習が必要だったが、篠笛希望者が多く、リコーダーの音よりも篠笛の方が「こきりこぶらしい」と考えたようだ。子どもたちはBパターンを「民謡風」「本格的」と名付け、練習に励んでいた。やはり、教科書の編曲よりもこの音楽は民謡らしいほうがよいという意識が強かったようだ。その他の楽器については、Aグループは、小太鼓とウッドブロック、Bグループは小太鼓・ウッドブロック・すず、Cグループは小太鼓とウッドブロックを選択していた。演奏の仕方は各グループで工夫を凝らし、デデレコデンを最後にもう一度入れて締めくくったり、篠笛でデデレコデンを入れたりしていた。各グループでの演奏の工夫はあまり強調しなかったが、それぞれ他のグループとの違いを出したかったようだ。

(2) 「きょう土の音楽」「こきりこぶし」学習後の子どもたちの感想（アンケートによる）
実践を終えて、子どもたちに題材全体についてのアンケートを行った。結果は以下の通りである。（全15人）

1 日本のいろいろな地方の民謡をききました。次の中から、どんな感じだったか自分の気持ちに近いものを選んでください。

ア：とてもそう思う イ：そう思う ウ：あまりそう思わない エ：そう思わない

- ①：いろいろなメロディーがあって、おもしろかった。
- ②：いろいろな楽器があっておもしろかった。
- ③：みんなちがっていて、もっとききたかった。
- ④：歌ったり、演奏したりしたくなった。
- ⑤：おどりたくなった。

	ア	イ	ウ	エ
①	13	2	0	0
②	13	2	0	0
③	11	4	0	0
④	8	6	1	0
⑤	1	11	3	0

2 「こきりこぶし」にしのぶえをえらんだのはなぜですか。

- ①：みんなうらしくなるからだ。
- ②：なんとなく、しのぶえにした。

	ア	イ	ウ	エ
①	10	5	0	0
②	0	2	3	10

3 「こきりこぶし」の合奏の感想。

- ・しのぶえがよくできてよかった。 ・うまくできた。 ・しのぶえはむずかしいけれど、入るととってもいい。
- ・こきりこはむずかしかったけれど、楽しくできてよかった。 ・こきりこがよくできた。
- ・こきりこやしのぶえの音がよかった。 ・こきりこのおとがよかった。
- ・昔の民謡が、じぶんたちでできてうれしいです。
- ・とってもいい演奏ができてよかった。
- ・こだいこだったけれど。いろいろな音が出せておもしろかった。
- ・いろいろな楽器を演奏できてよかった。
- ・こきりこぶしはすごく楽しかった。4人 ・こきりこの手を動かすのが大変だった。

アンケート結果によると、15人全員が日本の民謡に対して好意的に受け止めている評価（ア、イ）をしていた。また、「こきりこぶし」で、篠笛をえらんだ理由は全員「民謡らしくなる」を選び、「なんとなく」ではないことも分かった。合奏後の感想を見ると、篠笛やこきりこについてのものが多く、「音」のよさやバリエーションの楽しさも上がってきていた。その後、約1ヶ月後に行った「好きな音はどんな音ですか」というアンケートでは、次のような結果だった。（この時アンケートの時点での学習は歌唱が中心だった。）

- ・楽器（まとめて）5人
- ・手作りこきりこの音 2人 ・しのぶえの音 2人 ・鉄琴 2人 ・ピアノ 2人 ・リコーダー 1人
- ・高い声 1人 ・ウインドチャイム 3人 ・鍵盤ハーモニカ 1人 ・すず 1人 ・ウッドブロック 1人
- ・声 2人 ・木琴 1人 ・マリンバ 1人 ・太鼓 1人

日本の音楽や「こきりこぶし」の学習からは1ヶ月ほど経っているが、子どもたちの好きな音の中に西洋の楽器だけではなく「手作りこきりこの音」「しのぶえ」「太鼓」などが上がってきていることは、学習の成果ではないかと考える。

5 考察

(1) 本実践での成果

本実践では、第4学年15人を対象に、年間指導計画の試案の中から、「日本の音楽に親しもう」を行った。子どもたちは、日本の音楽を「未知の異文化の音楽」として感じることなく、各地域の民謡の特徴を感じ取ったり、「もっと聴きたい」と感じたりしていた。また、自分たちの手で民謡が演奏できたことを喜び、演奏することでより身近な音楽になり、異文化ではなくなっていることを示していた。さらに、こきりこの音や篠笛の音を1つの「音の素材」と感じ、西洋の楽器と同じように「好きな音」の中に入れてきている。このように、子どもたちが「未知の異文化の音楽」ではなく、身近な音楽の1つとして日本の音楽を受け入れることができていることには、2つの大きな要因があると考ええる。

第1点は、「こきりこぶし」で篠笛やこきりこを用いて実践を行っていることである。その音楽に用いる楽器を準備して子どもたちに提示することで、音の世界や音楽の世界が広がっていく。音の素材として、できるだけ多様な音を提供し、経験させていくことが大切である。(こきりこが本物ではないのが残念だが)

第2点は、実践学年は前学年(3年生)の頃から、多様な音楽や音を経験してきていることにある。前学年でも折に触れ日本の楽器や民族楽器などに触れる経験をしてきている。例えば、リコーダーの導入時には、リコーダーの紹介と共にいろいろな楽器も提示し、「チャレンジタイム」を設けて音を出す経験をしていた。日本の笛の種類は、「篠笛」「簞簰」「尺八」である。その他にアルトリコーダー、テナーリコーダー、バスリコーダー、ソプラニーノリコーダー、トランペット、トロンボーンも一緒に並べ、どれを吹いてもよい時間とした。初めて吹くリコーダーと共にいろいろな楽器が出ていることで、自然に西洋の楽器も和の楽器も区別なく触れてくることができた。

(2) 今後の課題

このように、年間指導計画に多様な音楽や音を頻繁に組み込んでいくことで、子どもの音楽経験を増やし、たくさんの「音」や様々な「音楽」を「違う音楽・特別な音楽」と感じることなく受け入れ、「音楽」に対する認識を広げていくことができる。本実践では、中学年(4学年)を対象に行っているが、これは1学年から6学年まで行わなければならない。6年間を通して、「音」や「音楽」の経験を積み重ねていくことで、すべてが同じ「音楽」という土俵の上に立つものとして認識され、お互いの音楽や文化を認め、尊敬し合う豊かな感性が育っていく。今後、中学年での年間指導計画の試案を実践しながら、6学年を見通して低学年、高学年の年間指導計画を作成し、実践していきたい。

〈引用文献〉

- 1) 文部省 『小学校学習指導要領解説 音楽編』 2000年, 77pp
- 2) 重嶋 博 『音楽授業の構造と展開』 1995年, 192pp

〈参考文献〉

- 3) 伊野義博 「教科書と一緒に進める日本音楽学習の年間計画(小学校1年生・2年生)」『新潟大学教育人間科学部紀要 第4巻第1号』 2001年, 125～141pp
- 伊野義博 「教科書と一緒に進める日本音楽学習の年間計画(小学校1年生・2年生)そのⅡ」『新潟大学教育人間科学部紀要 第5巻第1号』 2002年, 173～191pp
- 河邊昭子 『学力の質的向上をめざす 音楽科 授業の創造』 明治図書, 2005年
- 教育芸術社 『小学生の音楽4 指導書 研究編』 教育芸術社, 2005年
- 重嶋 博 『音楽授業の構造と展開』 音楽之友社, 1995年
- 高須 一・金本正武 『研究授業シリーズ』「小学校音楽科の授業づくり 中学年編」 明治図書, 2005年
- 宮野モモ子・伊藤俊彦 『小学校 新学習指導要領Q & A解説と展開 音楽編』 教育出版, 1999年
- 文部科学省 「義務教育の構造改革 中央教育審議会答申」 文部科学賞ホームページ, 2005年
- 文部科学省 「教育改革のための重点行動計画」 文部科学省ホームページ, 2006年